日本風景街道

七日町通り 西洋館や古民家、土蔵も

福島県会津若松 城下町あいづ道草街道

日本風景街道は「景観、自然、歴史、文化等の地域資源を活かして 国民的な原風景”を創出する運動」である。福島県会津若松市内の風景街道「城下町あいづ道草街道」は、それを実感できるモデル的ルートだ。

ルートの中心的な活動を展開している同市中心部の七日町通りは、城下町会津を発する会津五街道の起点だった同市大町四ツ角から、ＪＲ只見線七日町駅付近まで７５０㍍ほどの通りだ。どこでも見かける地方都市の中心市街地のようなところも多少あるが、大正から昭和初期らしいレンガ造などの近代建築がまとまってあったり、木造の西洋館や純日本風古民家、商家も土蔵も立ち並んだりして、不思議な雰囲気の街並みになっている。

地方都市の中心市街地といえば近年は、店じまいがやたら目につく「シャッター通り」が増えているが、ここは皆無のように見える。平日午後でもかなりの数の観光客らしいカップルやグループがウインドウショッピングしたりレトロなカフェで休んだりしている。

「東日本大震災と原発事故で、太平洋岸から約１００㌔も離れ放射能汚染もほとんどなかった会津でも、年間３５０万人近かった観光客が一挙に１００万人も減少してしまいました。幸い、昨年は会津を舞台にしたＮＨＫ大河ドラマ『八重の桜』でかなり人気が回復、七日町通りのまち歩きも連動して急速に注目を集めるようになったのです」

ルート活動を推進している「七日町通りまちなみ協議会」の事務局も担当する庄司裕副会長、うれしそうだった。

七日町通りは20年前、量販店進出などで30軒以上の空き店舗が出た。ショックを受けた商店主たちは連携し、地域の買い物客を呼び戻すまちづくり運動に取り組んできた。努力が奏功していつのまにか外部の人々も魅了するようになり、賑わいを取り戻したいきさつがある。

レトロな七日町歩きを楽しむ観光客

空き店舗解消

それだけに、庄司さんらは七日町通りの復活は、一過性の大河ドラマ効果だけじゃないという心強さを感じている。七日町通りのまちづくりは、全国でも数少ない地方都市中心市街地における空き店舗解消成功例として、一般財団法人住宅生産振興財団から6月、「住まいまちなみコンクール」の住まいのまちなみ賞を受けている。

こうした風景街道の活動をはじめ、古いもの、人と人のきずな、手づくりのぬくもりなど、効率だけでないアナログ的な価値について、日本中が再認識し始めている現われなのだろう。

ルートはもちろん、昔からの観光名所で『八重の桜』でも戊辰戦争の幕府軍拠点として壮絶な抵抗戦の舞台となった鶴ヶ城（若松城）や、悲劇が語り伝えられる白虎隊士の墓などの史跡は重要拠点に組み入れている。

修学旅行小学生の漆器店見学

もう一つ驚くのは、小中学生の修学旅行や宿泊学習などを含む県外からの教育旅行が最近目立って増えたことだ。大震災後は大幅に減ったが、昨年度は約３７０件（同市観光ビューロー調べ）と回復している。

修学旅行の児童も

新潟県の妙高市立妙高高原北小学校6年生26人は、修学旅行として七日町通りを歩き、会津漆器や紙器づくりについて体験学習した。

引率の猪又英一校長は「物見遊山でなく何か学ぶことができればと、宮城県の被災地視察も併せ付き添いました。津波にさらわれた中学生の自宅跡を訪れて衝撃を受けたこと、伝統の街並みや工芸技術を今日に大切に継承していることなどをどう今後に生かしていくか、児童たちは真剣に考えているようです」と話していた。

ロゴマークはコシノジュンコさんが手がけ、日本の象徴富士山をモチーフに、歴史や文化が道路を介して未来へと続いていくことへの願いをこめて表現した。